慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アナール学派の家族史研究 : J.-L. フランドラン, M. セガレーヌの業績を中心として
Sub Title	Etude sur l'histoire de la famille dans les Annales : a travers l es études de J.-L. Flandrin et de M. Segalen
Author	岡田, あおい
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1990
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.83, No.1 (1990. 4) ,p.156- 175
JaLC DOI	10.14991/001.19900401-0156
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19900401-0156

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」83巻1号（1990年4月）

研究ノート

アナール学派の家族史研究

——J.-L.フランドラン，M.セガレーヌの業績を中心として——

岡　田　あ　お　い

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　Ph.アリエスの業績
Ⅲ　家族史研究の展開
　1　J.-L.フランドラン
　2　M.セガレーヌ
Ⅳ　結びにかえて

Ⅰ　はじめに

L.フェーヴルとM.ブロックは，1929年，学術誌"Annales d'histoire économique et sociale"（1946年"Annales, Economies, Sociétés, Civilisations"に改称，以下"Annales E.S.C."と略す）を刊行し，当時，歴史学の主流を占めていた外交史・政治史を中心とする実証主義歴史学を批判し，「明確な意図，解決すべき問題，検証すべき作業仮説をいつも念頭において出発する」[(1)]仮説検証という科学的方法に則った新しい歴史学を主張した。フェーヴルは，歴史学を「『人間』を対象とする学問，人間の過去を対象とする学問」[(2)]であるとし，すべての事象を全体的な連関のなかで捉える「全体史（l'histoire totale）」[(3)]を志向した。彼らを創始者とし，この学術誌を研究の場とするフランス歴史学の一研究グループをアナール学派[(4)]と総称する。この学派の中には，定量的データに基づく"時系列史（l'histoire sérielle）"[(5)]を重視する研究者もいれば，

＊　本稿作成にあたり，文学部山岸健教授，平野敏政助教授，ならびに経済学部松村高夫教授から貴重なコメントを頂戴した。ここに深く感謝の意を表したい。

注（1）　Lucien Febvre〔1953：8；（訳）1977：10〕。

（2）　ibid.〔12；（訳）17〕。

（3）　アナール学派第2世代に属するF.ブローデルの「この雑誌（"Annales E. S. C."）でわれわれが主唱する歴史学とは，人間諸科学にむけて開かれんとする歴史学である。すなわち，われわれが関心を引かれるのは，歴史学そのものというよりも，今日ではそれらの人間諸科学の総体なのである。」〔Fernand Braudel, 1960：493〕という論述からも明らかなように，アナール学派の志向する「全体史」は，「歴史学を単なる資料操作に終らせずに，経済学，社会学，地理学，人類学，言語学，心理学，自然科学等の諸概念を歴史研究に適用し，歴史の領域においてこれら諸科学の壁を打ち破っていこうとする試みであり，19世紀の科学の分化発達によって断片化した人間の研究に新しい統合をあたえようとするもの」〔竹岡敬温，1978：28〕である。

（4）　アナール学派の成立過程に関しては，Peter Burk〔1980；（訳）1986：3-32〕，H. Stuart Hughes〔1968；（訳）1970：13-43〕，井上幸治〔1979〕，服部春彦〔1980：344-351〕，杉山光信〔1981〕，本池立〔1982〕参照。アナール学派の特徴及びその動向に関しては，Febvre〔1965（1953）：（訳）1977〕，Marc Bloch〔1949；（訳）1956〕，Georg G. Iggers〔1975；（訳）1986：55-106〕，Jacques Revel〔1979〕，Emmanuel Le Roy Ladurie〔1985〕，二宮宏之〔1986：3-48〕，福井憲彦〔1987：2-50〕，山瀬善一・中村美幸〔1979〕，湯浅赳男〔1985：44-71〕，竹岡敬温〔1990〕参照。

人口動態に関する定量的データを基盤にし，定性的データを用いる“マンタリテ（mentalité）”[6]の歴史を重視する研究者もいる。それは，この学派が，創設以来，対象においても方法においても狭い枠に閉じ込もることなく，自由に研究を進めるという基本的性格を持つことに由来する。従って，厳密な意味でのアナール学派という学派が存在するわけではなく，その輪郭は曖昧である[7]。現在は，J.ル・ゴフとE.ル・ロワ・ラデュリに代表される第三世代の研究者[8]が，研究を進めているが，その中で，家族史研究は，アナール学派と同時期に家族史研究に着手した「人口史・社会構造史に関するケンブリッジ・グループ（Cambridge Group for the History of Population and Social Structure）」[9]（以下，ケンブリッジ・グループと略す）と勢力を二分しながら，急速に研究成果を蓄積している。

従来の歴史学では，家族は，「無視されるばかりでなく，運動に逆らい，歴史に逆らう現実のくずのように拒否されてきた。」[10]アナール学派も，創設当時から家族史研究に着手していたわけではない。家族史に強い関心を示し始めたのは，1960年代後半のことである。

いかなる動機づけによってアナール学派は家族史研究に着手したのだろうか。まず，外在的要因として，J.-L.フランドランが，「今日歴史家たちが家族について語りはじめているとすれば，それはおそらく私的生活の諸問題が現代の状況に蔓延してきたということであり，つまり，夫と妻のそれぞれの権利と義務，子どもに対する彼らの権威，離婚や避妊や中絶の可能性が国家の関心事となったということである。日々に明白なものとなっていく生活習慣の変化を目のあたりにして，実際，ある人々は伝統的な道徳を保護するように国家に求め，またあるものは『不可避的な』発展は加速するようにと主

注（5）“時系列史”とは，P.ショーニュによって命名された，「物価，賃金，人口，その他の確定可能な変数によって一つのシステムを分析する」〔竹岡敬温，1978：32〕数量的歴史研究をいう。“時系列史”の動向に関しては，Le Roy Ladurie〔1973：15-22；(訳)57-79〕，竹岡敬温〔1978〕，服部春彦〔1980：351-358〕参照。具体的な研究については，安元稔〔1989〕参照。

（6）“マンタリテ（mentalité）”は，“心性”と翻訳されることもある。二宮宏之は，“マンタリテ”を「人びとの心の，自覚されない隠れた領域から，感覚，感情，欲求，さらには，価値観，世界像に至るまでの，さまざまなレヴェルを包みこむ広い概念」〔二宮宏之，1986：75〕と定義している。また，アリエスは，“マンタリテ”について「『主観性（subjectivité）』という用語の方を好んで用いるだろう。変幻自在の境界をもつこの世界は，ただ単に無意識，認知されないものだけでなく，秘密，告白されないもの，あるいはもっと単純に，繰り返しや慣例のために，月並みなものとなり人の注意を引かなくなった慣習，といったものを内包している。要するに，組織・計画・準備された行動・明瞭な思考・意識的なかけひきといったものには，何らかの理由で入りきれないものすべてが，そこには含まれている」〔Philippe Ariès，(訳) 1983：3〕と『<教育>の誕生』「日本語版への序文」で述べている。“マンタリテ”の歴史研究は，近年盛んに行われているが，“マンタリテ”概念は，アナール学派の研究者間で統一がとれているわけではなく，概念の曖昧さゆえに批判も受けている。例えば Michael A. Gismondi〔1985〕。

デュルケム学派の「集合意識論」とアナール学派の“マンタリテ”概念との関わりについては，宮島喬〔1979〕参照。アナール学派の“マンタリテ”の歴史の研究動向に関しては，Ariès〔1978；(訳) 1983〕，Jacques Le Goff〔1974（英訳）1985〕，Michel Vovelle〔1977〕，二宮宏之〔1986〕参照。事例研究に関しては，Ariès〔1975；(訳) 1983〕参照。

（7）福井憲彦〔1987：4，22〕参照。

（8）Le Goff〔1976〕，Le Roy Ladurie〔1985〕，André Burgiére〔1989〕，山口昌男〔1976〕，福井憲彦〔1983-a〕〔1983-b〕参照。

（9）ケンブリッジ・グループの家族史研究に関しては，Peter Laslett〔1965；(訳) 1986〕〔1972；(訳) 1983〕〔1977〕，斉藤修〔1988〕，米山秀〔1987〕参照。アナール学派の家族史研究との比較に関しては，岡田あおい〔1990〕参照。

（10）Burguière〔1972：799〕。

張し，その一方でさらに別の人々は，その変化を政治体制に対する武器にしようとしている。それゆえ，その時代の政治的葛藤に注意をむける歴史家であるならば，我々の祖先の『私生活』にどうして無関心でいられるだろうか[11]」と述べているように，フランス国内の社会状況があげられるだろう。次に，内在的要因として，アナール学派第三世代が人類学に接近したことがあげられる。ル・ゴフは，人類学のパースペクティブの導入によって，アナール学派の歴史学に変革が起こったという[12]。その第一は，「ほとんど動かない時間[13]」としての先祖伝来の儀式など家族に結びついた慣習が歴史学の領域に入ってきたことである。こうした日常的人間への方向転換の中で，「新しい歴史学[14]」は「もっとも変わらざるもの」と見なされうる“マンタリ

注 (11) Jean-Louis Flandrin〔1984 (1976)：7〕。

(12) Le Goff〔1973；(訳) 1983〕〔1976〕，Burgiére〔1978-b〕，Le Roy Ladurie〔1985〕参照。

(13) ブローデルは，“La Mediterranee et le monde méditerranéen à l'époque de Phillippe II”〔Braudel, 1987 (1949)：13〕において，歴史には，〈1〉伝統的な歴史，つまり，「事件誌ないし個別事象の歴史」で，これは「表層で湧きたつ波のごときものであり，個人が経験的に感得しうる時間，〈2〉ゆるやかに変動してゆく歴史，「社会集団の歴史，社会史」であり，これは「社会的な時間であり，海にたとえれば，たとえ表面は静かでも底でうねっている海流である」，〈3〉ほとんど動かざる歴史，「人間と人間をとりまく環境との関係のあり方の歴史」であり，これは「地理的時間であり，海にたとえれば地中海という大枠である」という三つの時間があるという見方を明らかにし，この時間に関する概念枠組を‘Histoire et sciences sociales. La longue durée (1)’〔Braudel, 1969 (1958)：41-83；(訳) 1989：15-68〕で展開した。この論文の冒頭でブローデルは，「問題が過去であれ現在であれ，社会的時間がもつこの複数性についての明確な意識は，人間科学に共通する方法論に不可欠なのである」〔ibid., 43；(訳)：18〕と，人間諸科学が対象とする人間の生活にかかわる時間の多元性を強調し，三つの時間を〈1〉短い時間，〈2〉変動局面 (conjoncture)，〈3〉長期持続 (la longe durée) という概念で捉え直している。(本稿では，‘conjoncture’を翻訳に従い「変動局面」と訳すが，「局面状況」と訳されることもある。)

〈1〉短い時間……人間の一生を尺度にして測定しうる，軍事的・政治的出来事が泡のように継起する時間。「短い時間，個人，事件に注意を払う伝統的歴史学は，長い間われわれをひと息で語れるような，あわただしくドラマチックな物語に慣れ親しませてきた。」〔ibid., 44；(訳)：19〕しかし，体系的に把握される（短い時間を中・長期に広げ，またそこに戻す）とき，短い時間は単に否定されるのではなく歴史的認識の全体の中に新しく組み込まれる，と述べ，実証主義歴史学が扱ってきた政治的事件・日常生活の偶発事を単に批判するのではなく短い時間の対象として捉え直すことが必要だとする。

〈2〉変動局面……短い時間と長期持続を媒介し，10年，20年といった長いスパンで区切られた過去を問題とする経済的周期・社会制度や文化構造・文明などが緩慢に変貌していく時間。「周期間」をもち，その反復を通じての趨勢をもつ経済変動，社会変動ばかりでなく，学問，技術，政治制度，知的道具立て，文明もまたその生存と成長のリズムをもっている，と述べ，これらの時間も変動局面の概念で捉えられるとする。

〈3〉長期持続……表層の『事件』から下降して行きついた底辺であって，短い時間のみならず，変動局面をも支えている土台。長期持続とは，気候・植物などにかかわる，永続的なもの・ほとんど不動のものを指す。ブローデルは，「歴史家にとって，長期持続を受け入れることは，スタイル・姿勢の変化，思考の転換，社会的事実についての新たな発想法を受け入れることを意味する」〔ibid.,：54；(訳)：29〕と述べている。彼は，この長期持続を「構造」とみなす。

Braudel〔1979；(訳) 1985〕，Vovelle〔1978〕，服部春彦〔1980：358-363〕，湯浅赳男〔1985：54-59〕参照。

(14) アナール学派第1世代のフェーヴルらの歴史学を「新しい歴史学」と称することもあるが，ここでは，第3世代が自称する，人類学的視点を取り入れた歴史学を指す。Le Goff〔1978；(訳) 1984〕，Le Roy Ladurie〔1973；(訳) 1980〕，福井憲彦（編）〔1984〕参照。

テ”の研究へと向かうという。第二は，「歴史的」社会にあっては，かき消されてしまった社会構造の解明に歴史家をうながしたことである。このように社会状況と学派内の理論的変革が，アナール学派を家族史研究に導いた要因と考えられる。

その先駆的業績としてPh.アリエスの『<子供>の誕生　アンシァン・レジーム期の子供と家族生活』(以下,『<子供>の誕生』と略す)をあげることに異論はないだろう。アリエスは，「わたくしにとっては，これらの現象（家族・子ども・死・性）の一つ一つは，心的現象の神秘的な領域を照らし出すための，ひとつの，そして，私の視点にとっては最も有効な方法なのである。この領域とは，これらの現象を内に含みながら，かつそれらを超えたものである」[15]という。彼の研究の主題は，家族や子どもを一つの現象とし，ある時代の人々によってほとんど自覚されていない“マンタリテ”を解明することであった。もっとも“マンタリテ”の歴史それ自体は，フェーヴルとブロック，それ以後のアナール学派の研究[16]が先行しており，アリエスは，それらを継承しつつ，非常に接近した距離ではあるが，一定の距離を保ちながら，独自の研究を進めたのである。

その後，1975年E.ショーター[17]が，そして，1977年L.ストーン[18]が，アリエスの「家族観」研究をそのままの形で継承し，彼の仮説を検証する著作を出版した。また，“Annales E.S.C.”は1972年「家族と社会」の特集号を，17世紀学会の会報誌“XVIIe siècle”も1974年「17世紀と家族」の特集を，それぞれ組んでいる。アナール学派の家族史研究は，アリエスの方法をそのままの形で継承したものもあれば，全く異なるものもある。アナール学派には，ケンブリッジ・グループのような，統計資料の分析から家族構造を解明しようとする一貫した研究方法[19]を見いだすことはできない[20]。しかし，彼らは，過去の人々が抱いていた「家族観」の解明というパースペクティブを共有しているのである。

本稿の目的は，アリエスのこの先駆的業績をアナール学派がいかに継承しながら，新しい視点並びに研究方法を家族史研究に導入していったのかを検討することである。そこで，まず第一に，アナール学派を家族史研究に導き，肯定的にせよ，否定的にせよ現在に至るまで継承されているアリエスの家族論[21]について論じ，次に，彼の家族論を継承しながら，新しい視点を家族史研究に導入したアナール学派のフランドラン[22]とM.セガレーヌ[23]の研究について論じたい。ア

注 (15) Ariès〔(訳) 1983：1-2〕(『<教育>の誕生』「日本語版への序文」)。

(16) Ariès〔1978；(訳) 1983〕参照。

(17) Edward Shorter〔1975；(訳) 1987〕。

(18) Lawrence Stone〔1977〕。

(19) 速水融・安元稔〔1968〕，Edward Anthory Wrigley〔1969；(訳) 1982〕参照。

(20) 例えば，Alain Collomp〔1972；(訳) 1983〕，Bernard Derouet〔1980；(訳) 1983〕，Micheline Baulant〔1972〕，Flandrin〔1984 (1976)〕，Alanin Bideau〔1980〕は，歴史人口学的な方法で研究を行っている。Burguière〔1978-a；(訳) 1983〕，Nicole Belmont〔1978；(訳) 1983〕，Le Roy Ladurie〔1972；(訳) 1983〕は，歴史人類学的な方法をとり，Françoise Loux〔1978；(訳) 1983〕は，民俗学的な方法をとっている。

(21) 本稿では，Ariès〔1973 (1960)；(英訳) 1962；(訳) 1980〕〔1975；(訳) 1983〕〔1978；(訳) 1983〕を用いたが，他に〔1971 (1948)；(訳) 1983〕〔1949；(訳) 1983〕〔1953；(訳) 1983〕〔1960；(訳) 1983〕〔1972；(訳) 1983〕〔1982；(訳) 1982〕〔1983〕〔1985-a〕〔1985-b〕などがある。

(22) 本稿では，Flandrin〔1984 (1976)；(英訳) 1983〕〔1981；(訳) 1987〕を用いたが，他に〔1972〕〔1975；(訳) 1989〕〔1969 (訳) 1984〕〔1983〕〔1985〕などがある。

(23) 本稿では，Martine Segalen〔1980-a；(英訳) 1983；(訳) 1983〕〔1981-b；(英訳) 1986；(訳) 1987〕を用いたが，他に〔1977〕〔1980-b；(訳) 1984〕〔1986〕〔1981-a；(訳) 1985〕〔1981-c；(訳) 1984〕〔1985〕〔1986〕などがある。

ナール学派にはA. ビュルギエール，G. デュビー，A. コロン，E. バタンテール，ショーターをはじめ数えきれないほどの家族史研究者[24]がいる。その中から2人を取り上げることにしたのは，彼らの研究が，アリエスの方法を発展させ，そこに独自性を展開したこと，かつ，アナール学派の家族史研究の特徴を顕著にあらわしていること，さらに現在，家族社会学に大きな影響を及ぼし，家族史研究を不動のものにしたことによる。

なお，アナール学派の家族史研究は，日本では女性史研究[25]との関連で紹介されることが多いが，本稿では，過去において女性がどのように扱われていたか，いかなる地位を占めていたかを論じることを目的とするものではない。本稿の目的は，あくまでアナール学派の家族史研究の視点並びに方法の展開を明らかにすることである。

II　Ph. アリエスの業績

これまで，『<子供>の誕生』は，あたかも子ども史がその主題であるように理解されてきた。近代的子ども観の成立を家族と学校の変化の中にさぐることがアリエスの課題であったとみる傾向が，特に子ども史，教育史の研究者の間で強い[26]。

しかし，この著作の英訳本の序文のなかで，アリエス自身が，この著作の主題を「家族観念の近代化を究明することだ[27]」と述べていることが示唆するように，この著作の主題は，子どもとの関わりの変化とともに人々の意識や生活が家族中心的なもの，つまり近代型家族に導びかれる，その歴史を描くことにある，と理解すべきである[28]。この主題が誤解される原因を「子供期という意識」の存在の有無に論争が傾いていることに求めることもできるが，最大の原因は社会学のこの著作に対する評価に起因するものと考えられる。社会学の分野では，アリエスのこの家族論を無批判に，既存の家族変動論を強化する研究として受けとめている。例えば，L. K. バークナーは，アリエスの家族論を拡大家族世帯の衰退，核家族の出現，子どもや若者を重視する趨勢といった通時的な家族発達に関する社会学概念とも一致している，と述べ，既存の家族変動論の域を脱するものという評価はくだしていない[29]。すなわち，「拡大家族から核家族へ」あるいは「制度から友愛へ」といった従来の家族変動図式を図像記述分析という新しい資料解釈法を用いて家族理念の側面から補強，強化したという評価しか与えていないのである。この評価は正しいだろうか。もし，アリエスが

注 (24) Georges Duby〔1972；(訳) 1983〕〔1981；(訳) 1984〕, Antoinette Chamoux〔1972〕, Collomp〔1977〕〔1986〕, Elisabeth Badinter〔1980；(訳) 1981〕, Jean-Paul Aron〔1980；(訳) 1984〕, Daniel Fabre〔1986〕, Arlette Farge〔1986〕, John R. Gillis〔1981 (訳) 1985〕, Shorter〔1973；(訳) 1984〕, Pierre Goubert〔1977〕, Emmanuel Todd〔1983〕参照。アナール学派の家族史研究の動向に関しては，二宮宏之〔1983〕，福井憲彦〔1985〕，落合恵美子〔1985〕，宮坂靖子〔1988〕参照。また，Miriam Crisman〔1983〕, Harvey Smith〔1984〕, Louise A. Tilly〔1979-a〕〔1979-b〕が，Journal of Family History で，Roderick Phillips〔1976〕が，Social Historyで，フランス家族史の研究をおこなっている。

(25) 女性史研究におけるアナール学派の家族史研究の扱いに関しては，長谷川博子〔1984〕，荻野美穂〔1988〕，落合恵美子〔1989〕参照。

(26) 宮沢康人〔1988：3-4〕。子ども史に関しては，Ariès〔1972；(訳) 1983：115-251〕, Linda A. Pollock〔1983；(訳) 1988〕，産育と教育の社会史編集委員会（編）〔1984〕，宮沢康人〔1985〕，森田伸子〔1986〕〔1988〕参照。

(27) Ariès〔1960；(英訳) 1962：9〕。

(28) 宮沢康人〔1988：4〕。アリエスの家族論に関しては，Paul-Henry Chombart de Lauwe〔1972〕, François Lebrun〔1975〕, Phillips〔1976〕, Vovelle〔1977〕，宮坂靖子〔1985〕参照。

(29) Lutz k. Berkner〔1973：395-405〕。

既存の家族変動図式に則して家族論を展開したのならば，時代区分の曖昧さという批判を受ける危険を犯してまで，「子供期という意識」の萌芽，形成過程を扱う必要はなかったであろう。しかし，アリエスは，近代的家族意識の形成過程（15世紀～18世紀）に多くの頁を割き，これを明らかにしようとしているのである。アリエスは，図像記述分析から，中世の家族の特徴を，「感情的というよりはむしろ，道徳的かつ社会的な現実であった。[30]」「……子供はごく早期に自分の生まれた家族のもとを離れていたのであり……（略）……したがって，この時代に家族は，親子の間で深い実存的な感情を培うことはできなかった。このことは，親たちがその子供たちを愛していなかったことを意味するのではなく，親たちは家庭の設立にあたって，共同作業におけるこうした子供たちの協力にたいするのに比べれば，自分たち自身にたいして，また自分の子供たちがもたらす愛着にたいして，それほど意を払わなかった[31]」としている。この家族の実体並びに意識は，15世紀を起点として転換される。しかし，この転換は深く緩慢な過程であり，貴族・ブルジョア・職人や商人の名士たちの階層に限定されたものである。あらゆる層にこの新しい意識が広まるのは20世紀初頭のことであり，法定的転換は，アリエスによれば学校へいく人々の範囲が拡大したことである。この状況とともに家族意識と子供期の意識が接近する，としている。「学校が見習奉公に置き替っていくことは，かつては分離されていた家族と子供たちの接近を，すなわち家族意識と子供期の意識の接近をも表明しているのである。家族は子供にまなざしを集める[32]。」「……とはいえ子供は，通常は学院の寄宿生ではなかった。子供は下宿屋の主人や学級担任教師のもとに下宿して暮らしていたのである。市の日になると，お金と食物が届けられる。生徒とその家族との間の絆が強まるのである[33]。」「……だが学校の増大は，かつての見習修業という実地訓練の形式を理論的な教育に置きかえようとする要求に対応すると同時に，子供たちをあまり手離さずに，できる限り身近に置いておきたいという欲求にも対応していたのである。これは家族が目ざましい変化を遂げていたことを証言する現象である。家族は子供のことを思い，家族生活は，親子の一層感情的な交流と一体化する[34]。」この時期は，夫婦と子どもたちを中核にした家族の図像記述が発達していく時期でもある。しかし，この家族は，感情や生活様式によって結び付いている近代家族とは区別されるものであることに注意する必要がある。「……この17世紀の家族は近代家族ではなく，社交に大きな比重を残していることで区別される。」「……家族は社交関係の中枢であり，家長が命令を下す複雑で階層的な小社会の首都なのである[35]。」アリエスは，社交関係の衰退とともに近代的家族が広まり，近代的家族を，社会から切り離され，孤立した親子からなる集団として社会に対立するものと定義している。

以上，『<子供>の誕生』に則しながら，アリエスの家族論を概観してきたが，注目すべきことは，彼の家族論の図式は，既存の社会学で用いられている図式とは異なるという点である。つまり，アリエスは，中世的家族観から，近代的家族観へと“マンタリテ”が変化する過渡期として，17世紀的家族観の存在を重視しており，既存の社会学の類型では，扱いえなかった「時間」がここに登場するのである。この17世紀的家族には，学校と家族意識がなぜ結びつくのか，あるいは，なぜ社交関係が衰退したのか，民衆にはいかなる形態でこの新しい家族意識が伝わるのか，など不明瞭な点が数多く残っているが，にもかかわらず，アリエスが，これまでの家族社会学が自明としてきた「家族の変動の原因を

注（30）（31）Ariès〔1973（1960）：414；（訳）1980：346〕。
（32）（33）（34）ibid.〔415-416；（訳）347〕。
（35）ibid.〔457；（訳）379〕。

工業化に求める」単一の単純なモデル[36]で家族の変動を説明することに対する問題提起となった点を十分に評価しなければならない。

アリエスの著作の意義の第一は，人間の行動や感情は，ある時代のある社会によってつくられ，時代と共に変化するものであることを検証した点にある。社会のあり方，生活様式，思考方法といった，歴史的変化を遂げるものとは別に，人間の行動や感情の少なくともある部分は不変である，という我々が疑う余地のない，いわば常識ともいえるものも，実は永久不滅のものではないことをアリエスは，「過去には子供期という概念はなかった」という仮説を検証することによって呈示したのである。

第二の意義は，家族史研究の領域に資料上の広がりをもたせたことである。フェーヴルが「詩，絵画，戯曲も，われわれにとって記録であり，生きた歴史の潜在的な思想と行動で満ち満ちた証拠です[37]」と述べ，絵画などを資料に用いることを提唱したにもかかわらず，アリエスが図像記述分析を用いるまで絵画などを資料にすることはなかった。図像記述分析を使ってこれらの資料を学問のレベルで利用可能にしたこともアリエスの功績といえるだろう。

しかし，アリエスのこの研究には，限界があることも認めないわけにはいかない。バークナーやM. ポスター[38]が指摘しているように，アリエスの検証には，貴族，ブルジョアといった限られた階層しか対象とされていない。この点は，資料の限界，資料の分析方法にかかわるものと考えられる。アリエスが，彼の仮説を検証するために用いた資料は，絵画であり，書簡であり，日記といったものであった。中世に絵を描かせることができたのは，当時の社会上層でしかありえなかったであろうし，文字を書くことができたのも社会上層以外にはありえない。このようにアリエスが検証に用いた資料には一定の限界がある。さらに，このような資料を用いておこなわれる図像記述分析という分析方法それ自体にも問題がある。絵画が，本来，生活の内部を記録するために描かれたものではなく，寓意的な目的に従って何らかの諺や聖書の一場面の挿画をもくろんでいたように，分析に用いられた古い資料は，もともとこのような分析のために作られたわけではない[39]。しかし，これらの資料には，私たちの現代的な好奇心を満足させてしまう危険性が多分に含まれている。フランドランが，「アリエスの著作の最大の功績は，新しい研究への門戸を開いた点にあるというべきだろう。……（中略）……ただ，今後の研究は独創性より学問的厳密さをめざさねばなるまい[40]」と述べているように，アリエスの検証には主観性を免れない論述も多いのである。しかし，これはアリエスに限ったことではなく，図像記述分析が不可避的にもつ弱点であることは言うまでもない。

Ⅲ　家族史研究の展開

1　J.-L.フランドラン

フランドランが，アリエスの家族史研究を評価し，アリエスの家族史研究の限界をいかに克服し，「学問的研究」のレベルまで到達させようとしているかは，前節の最後の引用から読み取れるだろう。そこで，フランドランが，アリエスの家族史研究をいかに継承し，「学問的研究」に発展させたのかを検討することにしよう。

まず，フランドランが，研究対象をどこに求めたのかを明らかにしたい。彼は，“Familles. parenté, maison, sexualité dans l'ancienne

注（36）家族の変動に関しては森岡清美〔1987：182-200〕参照。
（37）Febvre〔1953：13；（訳）1977：18〕。
（38）Berkner〔1973〕，Mark Poster〔1978〕参照。
（39）Collomp〔1986：505-506〕。
（40）Flandrin〔1981：148；（訳）1987：181〕。

société"（以下"Familles"と略す）の中で，「かつての家族―主として16・17・18世紀の家族―に関する我々の知識の最初の報告書を作り上げることは必要であるように思えた」[41]と述べている。さらに，「公的生活の筋書きを作っていた偉大な人物達の家族の問題よりも，我々の好奇心を呼び覚ますのは大衆の私的生活の構造である。かつての家族は，今日の家族とどこが異なり，どこが類似しているのか？　その大きさ(taille)について何が正確にわかっているのか？かつての家族を構成していた人々の年齢や親族関係についてはどうか？　配偶者間の関係はどうか？　子どもに対する両親の態度はどうか？」[42]と述べ，16世紀から18世紀の民衆の家族をその射程に入れているといえるだろう。

では，いかなる方法でフランドランは，アリエスの研究を発展させようとしたのか。フランドランは，"Familles"の序章で，家族概念の規定を試みる[43]。すなわち，「家族（famille)」という用語は，「今日さまざまな現実に適用されている」と述べ，辞書『プチ・ロベール（Petit Robert)』を用いて，この言葉は，広義においては，「結婚と親子関係によって相互に結び付けられた人々の全体」を意味し，さらには「ひとつひとつ系譜を下っていく諸個人の継承関係（succession)」すなわち，「出自（lignée)，血筋（race)，家系（dynastie)」といった垂直的に広範な広がりをもつ親族関係を意味する。しかし，「家族」という用語には，これよりもより普通に用いられる狭義の意味があり，「辞書にはこの意味を最初に記載し，社会学者は一般にこの意味だけを考慮にいれている」という。この意味とは，「ひとつ屋根の下に生活する縁続きの人々」そして特に「父と母と子どもたち」を指す。「共住」の理念と「親族」の理念が結び付いているこの定義は，我々の社会に折り合うものだが，「16世紀から18世紀のあいだにおいても同様であっただろうか」と問題提起をするのである。フランドランは続けていう。「古いイギリスやフランスの辞書を読むと，今日最も一般的なものとなった定義の中では固く結び付いている，共住の理念と親族の理念との間で，家族の概念は分裂していたことがわかる。この言葉は，実際，今日よりもずっと多く，共に共住しているわけではない親族の全体を想起させていたし，他方ではごく普通に，必ずしも血縁や婚姻によって結び付けられていない共住者の全体をも示していた。」彼は，これを当時の辞書を使って例証し，「家族」という用語は，18世紀まで「親族関係」という理念と「共住」という理念が統合されずに存在していたことを強調する。19世紀になると「共住の理念と近親者の理念が簡素な定式と定義のうちに結び付けられる」ようになり，「今日最も一般的に定義される意味での家族の概念は，それゆえ，我々の西洋文化のなかでも，最近になってはじめて存在するものなのである」というわけである。この用語の分析から，フランドランは，「フランスにおいてもイギリスにおいても，家内集団（groupe domestique）の成員―親族と家内奉公人―を『家族』として統一していたものは，『家族の父（père de famille)』に対してともに従属しているということであったということ。そして，両国において，『父―母―子ども』の3者関係は，系族に対してまた奉公人に対して少しずつ独立してゆき，19世紀において我々の社会の基礎となる細胞となったこと」を研究仮説として提示する。つまり，フランドランは，かつて人々が「家族」と呼んでいたものは，「父―母―子ども」の三者関係とは同一視されないということ，彼らは，系族や親族の関係と共住者との関係という二つの意味をこの「家族」という言葉で呼んでいたこと，我々が「家族」という言葉で呼んでいるものは，比較的最近に意味づけられたに過ぎないことを強調しているのである。

注 (41)　(42) ibid. [1984 (1976)：8-9]。
(43)　ibid. [10-15]。以下，Le concept de famille の要約。

以上の論述から，前節で論じたアリエスの家族論が補強されていることが理解できるだろう。アリエスの用いた絵画・書簡などの資料とは異なる資料を用いて，過去の「家族観」を分析し，「父一母一子ども」の三者関係が系族や奉公人から少しずつ独立し，現在我々が抱いているような家庭が「夫婦の間，親子の間に必要な感情の場」[44]となったのは比較的最近のことであることを，フランドランは呈示しているからである。少なくとも，この研究は，問題の多い図像記述分析を用いなくても過去の「家族観」を研究することが可能なことを我々に知らしめている。

しかし，フランドランは，『性と歴史』のなかで，「歴史家にとっては残念ながら物いわぬ階層が存在する。考え，話し，行動するが，書かず，ほとんど読まない人々である。彼らの心性の歴史に，ここで提案されている直接方式で接近することはできない」[45]と述べ，辞書の検討や，16世紀と20世紀の書名にあらわれた語を分析，比較する方法では，社会上層の“マンタリテ”を解明しているだけで，一般民衆の“マンタリテ”を解明することにはならないとしている点にも注目しておこう。そして，社会上層の“マンタリテ”を解明する方法と一般民衆の“マンタリテ”を解明する方法を分けなければならないことを次のように示唆する。フランドランは「歴史家たちはこれまで長い間，民衆文化，農村大衆の習俗に関心を示すときですら，民間習俗に関係した資料をなおざりに扱ってきた」[46]と，これまでの歴史学を批判し，トロア（Troyes）司教区教会裁判所の結婚契約破棄訴訟の記録を資料とし，16，17世紀の「クレアンターユ（créantailles）」という夫婦縁組のさいの民間行事を分析し，そこからこの時代の一般民衆の結婚観あるいは「愛」という感情を解明した。そして，社会上層と農民層の抱く「愛」という観念のもつ意味を比較し，「愛の観念は18世紀よりはるか以前から，農民文化にも存在していた。ただ，17世紀を通じ，支配階級の文化ではそれがしだいに感じるものに変貌してきたのに対し，ここではあいかわらず能動的観念であり続けた。19世紀になってもなお，農民の歌や諺は，愛を感じられるものとしてよりもむしろ，行なうものとして表現している」[47]と述べている。さらに，フランドランは，18世紀の農民の行動様式が社会上層の理念と同一方向に発展したとはいえないことを主張する。フランドランは，20世紀には普及した観念である「恋愛結婚」は，18世紀の社会上層にはこの観念が萌芽していることが認められるが農民層はこれとはまったく異なる観念をもち，この段階では，社会上層のもつ観念は，農民層に普及していないことを指摘している。これはまた，アリエスの「近代的家族観」は，社会上層から次第に一般民衆へゆっくりと普及していったという主張を傍証したことになる。このように，フランドランは，「愛」という“マンタリテ”について論じるのだが，この時，社会上層の文化と農民層の文化に分けて，これを論じることを主張した。これが，アリエスの研究を発展させた第一点であるといえるだろう。つまり，フランドランは，「物いわぬ階層」を“マンタリテ”史研究の対象に組み込み，アリエスの家族研究の欠点であった研究対象の限界性の問題を部分的には克服したのである。

さらに，資料の拡大と新しい分析方法によるアリエス理論の発展という点をあげておきたい。前述したように，フランドランは，アリエスが用いた絵画・版画などの資料に加えて，辞書・結婚契約破棄訴訟などの文献資料を用いた。すなわち，フランドランが用いた方法は，ある用語が辞書でどのように説明されているか，それ

注（44） Ariès〔1973（1960）：4；（訳）1980：3〕。
（45） Flandrin〔1981：40；（訳）1987：49〕。
（46） ibid.〔61；（訳）72〕。
（47） ibid.〔90；（訳）111-112〕。強調は原文（ただし，フランス語の原文には強調なし）。

を時系列的に調べ，過去の「家族観」という観念を分析したり，書名タイトルに出てくる用語の使われ方を分析するという手法であった。図像記述分析とこの方法を並列させて用いることにより，「学問的厳密さ」は増したことは疑いえない。しかし，この資料からは，フランドランが最も解明したかった「考え，話し，行動するが，書かず，ほとんど読まない人々」をすくいあげることはできない。そこで，農民の“マンタリテ”を分析するために，結婚契約破棄訴訟の記録を資料に用いたのである。このように，フランドランは，“マンタリテ”の研究に新しい資料を利用したのであるが，資料を解釈する場合には，多様な解釈を列挙するという形式をとり，常にひとつの回答だけを提示することを避けている。これは，歴史には多様な解釈が可能であるという彼の歴史観に関わっている。さらに“マンタリテ”の歴史的変化を「なにごとも単純ではない」[48]とし，単一な単純なモデルで捉えようとせず，常に多様だったことを強調する。例えば，「……農民たちの愛・結婚に関する行動にも，エリート層の場合と同じ方向（恋愛結婚）への変化があったことを予測させる徴候もあれば，それとはまったく逆方向への変化を暗示する徴候もみられる」[49]というようにである。多様性の強調，ここにフランドランの研究の到達点がある。しかし，アリエスの家族史研究の欠点が，フランドランによってすべて克服されたというわけではない。確かに，フランドランは一般民衆をこの研究に組み入れたという点は高く評価されるべきであるが，彼の用いる資料からは15世紀から18世紀までの民衆の結婚契約にまつわる“マンタリテ”しか扱えない。フランドランがいうように，「過去の家族的現実のひとつの側面，ひとつの次元を見いだすことしかしてくれない。」[58] 19世紀の一般民衆を扱うことはできないし，15世紀から18世紀の一般民衆の「結婚観」以外の「家族観」を解明することもできないのである。従って，研究対象の問題は一部克服されたというにとどめなければならない。

2 M. セガレーヌ

フランドランの扱う資料では解明できない研究対象に挑み，いくつかの新たな資料をアリエスが用いた資料に加えることによって研究対象を19世紀の農民家族に拡大し，さらに，これを歴史人類学・歴史人口学・社会学の学際領域に位置づけ，家族は包括的に研究されなければならないと主張したのが，セガレーヌである。セガレーヌが，いかなる点においてアリエスを継承し，資料をどのように用いることによってアリエスの限界を克服したのか。また，どのような独自な視点をセガレーヌが持っているのかを検討することにしよう。

まず，アリエスの家族論の継承から考えてみよう。それは，『妻と夫の社会史』のテーマそれ自体に読み取ることが出来るだろう。この著作のテーマは，フランスの農村社会（19世紀がその中心）における夫と妻の関係を日常生活のレベルで解明することであった。しかも，セガレーヌ自身も「ここで重要なのは……（中略）……むしろ当事者である農民たちが自分たちの状況をどのように認識しているかということである」[51]と述べているように，農村社会の夫と妻がもっている「夫婦観」の解明であった。これは，アリエスの“マンタリテ”研究の視点にほかならない。セガレーヌは，夫と妻の仕事と役割を中心に据え日常生活のあらゆる局面を検討し，現実の夫婦の役割関係を体系化することによって当時の農村社会の民衆の「家族観」を明らかにした。セガレーヌが明らかにしたかった

注 (48) ibid.〔19；(訳) 22〕。
(49) ibid.〔92；(訳) 114〕。（ ）は筆者による。
(50) Flandrin〔1984 (1976)：9〕。
(51) Segalen〔1980-a：174；(訳) 1983：231〕。

のは，夫と妻の労働領域の検討，夫と妻それぞれと村落集団とのかかわりの検討などを通して，夫は権威をもち妻はこれに従属するという，これまでいわれてきたような「夫婦観」を19世紀の農民はもっておらず，むしろ相互補完的な協力者という意識をそれぞれがもっていたということである。しかし，「家族観」を捉える方法は，アリエスともフランドランとも異なる。アリエスは図像記述分析という方法を用いてこれを捉えようとし，フランドランは，結婚という制度からこれを捉えようとしたのであるが，セガレーヌは，現実の夫婦の役割関係からこれを解明しようと試みたのである。19世紀という時代をセガレーヌは，「何世紀もの間つづいた農村の貧困状態もようやく終り，農業生産の相対的発展もあって，土地の所有が農民の手に届くものとなった」[52]時期とみている。アリエスは『<子供>の誕生』の中で，近代的「家族観」は，13世紀に一部の上流階級において萌芽し，非常に緩慢なペースで近代にはブルジョアへ，そして20世紀初頭に一般民衆へと普及していった長期の変動をともなう“マンタリテ”であるという結論を出している。彼はこの著作で「近代化」の問題について積極的に論じているわけではないが，この結論を言い換えれば，近代的家族観は，近代化の産物ではなく，それ以前の社会においてすでに存在していた“マンタリテ”である，ということになる。このアリエスの主張を受けて，セガレーヌは，都市では工業化が進みつつある一方で，生活が安定しはじめた19世紀の農村社会に焦点を絞っていった。つまり，セガレーヌはアリエスの論述が近代的な家族観の起源に関しては非常に詳細な検討がなされているが，一般民衆への普及過程に関しては明晰さに欠けるという弱点を補強するために，19世紀の農民の「家族観」を主題化したと考えられるだろう。社会学の通説では，この時期は工業化の影響を受け，家族が大きく揺れ動いているのだが，セガレーヌは，近代的家族観の萌芽の問題には触れていない。むしろ，産業化，都市化の影響を受けず，伝統的な「家族観」が農村社会では継承され続けていることを強調し，「農村社会では，『近代的な家族の誕生』は非常に遅れたと考えられる。なぜなら社会のしくみが本質的に共同体中心に組織されているからである」[53]と述べる。その一方で，「19世紀の家族がもっとよく解明されてこそ，20世紀における家族の変貌とその問題点が説明されるはずである」[54]と述べている。セガレーヌは現代の農村家族を射程に入れながら，アリエスの主張とは反対に，19世紀の農村社会では，近代的家族観はみられないことを主張したのである。つまり，セガレーヌは，農村の家族は，経済的要因に伴う変動に頑強な社会的・文化的枠組みを用いて抵抗していたものと考えていたのである。この見解は，結果的に家族社会学の通説への批判にもなっている。

さらに，絵画・書簡・結婚許可書といった古文書を資料とし，これらの資料を丹念に調べ検討するという方法をアリエスから継承したことを加えなければならない。前節でも指摘したように，アリエスの資料の使い方では社会上層しか扱いえなかった。従って，セガレーヌは，いくつかの資料を補充することによってこのアリエスの方法を一般民衆のレベルに応用したのである。

では，セガレーヌは，フランドランによっても克服しきれなかったアリエスの資料の限界から生じる研究領域の限界という弱点を，いかに克服したのか。それは，アリエスやフランドランには行いえなかった民俗学者の記録の読み直しを中核に据えた研究方法に求められる。例えば，「その女たちの慎ましいことといったらこの上ない。食事の用意をしなければならないの

注 (52) ibid. 〔14；(訳) 20〕。
(53) ibid. 〔44；(訳) 58〕。
(54) ibid. 〔14-15；(訳) 20〕。

で，彼女らは男たちと一緒に食卓につくことはなく，デザートになってはじめて客人と一緒に腰をおろすのであった」という民俗学者の言説を，セガレーヌは，「女が家族とともに食卓につかないという事実の中に，女が劣等視されていることの象徴をみようとしたのは，まさしく自文化中心主義的態度の現れであるといえないであろうか？　19世紀の研究者たちは，食事の用意や給仕をつまらない仕事として片づけてしまった」とし，「一家の母は食事の責任を任されている。この仕事をりっぱにやるには，主婦はいつも待機している必要がある。主婦自身は，坐らないから劣っているとは考えないで，坐らないから仕事がきちんとできると考え，それを誇りにしていたのではないであろうか」[55]と問題を提起する。これらの記録の読み直しをするために，仮説をたてこれを検証するために諺，絵画そして建築資料を用いた。例として，諺の解釈をあげるならば，諺は「書かれることよりは語られることが多く，語られるよりは身ぶりで示されることが多い農民社会について，また自分たちが生きていく環境にむしろ同化してしまう傾向が強い農民社会について，諺はその豊かな表現を駆使して詳細に物語ってくれる」[56]と述べ，資料としての価値を認めたうえで，ただし諺は「規範を述べているだけで，実情を描いているわけではない」[57]とし，たとえば，

「女が家を外にしてばかりいれば家は傾く。」（プロヴァンス）

「窓辺に鏡より，食卓にパンを。」（ブルターニュ）

といった諺は，女が家を留守にすれば家事に支障をきたすからというので，用もないのに外出することを禁じようとしている。しかし，ここで主題化されているのは，女同士のおしゃべりであり，これらの諺は，「夫は生産，妻は非生産的な家事を受けもつ」という民俗学者の言説の証拠となるものではなく，「女同士の接触から生じる女の力を伝統社会は恐れていたのだ」[58]とセガレーヌは主張する。諺を用いる際，実態のレベルと表現のレベルを混同しないように注意をうながし，慎重にこれらを扱うことを示唆している。これらの資料を体系的に用いることによってセガレーヌは，研究対象を拡大することに成功したのである。ここにおいて，アリエスの欠点であった研究領域の限界性の問題はかなりの程度克服されたといえるだろう。すなわち，フランドランが結婚契約破棄訴訟の記録を用いて15世紀から18世紀の民衆を研究対象に組み込み，セガレーヌが19世紀の民俗学者の残した記録を他の資料によって傍証するという慎重な作業をしながら再解釈することによって，19世紀の民衆を研究対象に組み込んだことにより，この問題はかなり克服されたものと思われる。しかし，資料の解釈にまつわる主観性の問題は解決されたとはいえない。フランドランがいうように「多様な解釈」が可能であり，「学問的厳密性」という意味では，まだ出発点に立っているとしかいえないのである。

最後に，セガレーヌの独自な視点はどこにあるのだろうか。まず『妻と夫の社会史』から読み取れる独自性は，セガレーヌのこの研究によって，われわれの目に19世紀の農村の家族を生き生きとした形で再生させたこの検証方法，つまり，日常生活の諸相を解明していくという方法にあるだろう。次に，歴史家にとっては現代に接近し過ぎている，かといって，社会学者にとっては余りに歴史的であったために解明されることがなかった19世紀の家族を扱ったところにある。「19世紀の家族がもっとよく解明されてこそ，20世紀における家族の変貌とそのもつ問題点が説明されるはずである」[59]と述べているように，セガレーヌの関心は現代の家族にある。ここにセガレーヌが19世紀の家族を解明した理

注（55）ibid.〔173；（訳）230-231〕。*Cf.* Shorter〔1975：59-60；（訳）1987：60-61〕。
（56）ibid.〔13；（訳）18〕。
（57）（58）ibid.〔149；（訳）194〕。

由もあるのだが，この研究によって，家族研究の通説として受容されていた民俗学者の言説が神話に過ぎなかったものとして否定されたことは大きな意義をもっている。また，この他にもこれまで社会学の分野で言われてきたような産業化，都市化によって家族が変動するという神話も問い直す必要性があることを知らしめた。セガレーヌはこの著作を通し，家族研究がこれまで変動を強調してきたことに対し懸念を示し，むしろ変動しない側面も研究するべきだということを説いている。次に，『家族の歴史人類学』からセガレーヌの独自な視点を明らかにしておこう。J．グーディが，「『家族』に関して，現在のところ包括的に利用できるテキストはほとんどないといってよい。もちろん前産業社会における家族については，主として社会人類学者が数多くの業績をあげている。また，ヨーロッパの特定の社会の過去を取りあげた書物も，歴史家によって書かれてはいる。しかし，こうした仕事はそれぞれに研究や調査の方法が違うので，非常に多様な種類の書物が刊行されるという結果しか生み出してはいない。本書において，セガレーヌはこのように異なっている分野を高い水準で統合することに成功した。……（中略）……狭い領域に閉じ込もることなく，人類学・歴史学・社会学といったさまざまな分野に広がりをもっていることが，まさしく彼女の力量の大きさを物語っているのである[60]」と紹介しているように，セガレーヌの独自性は，家族史研究を歴史学，人類学，社会学などの学際的な領域に位置づけようとしている点に求められる。

Ⅳ　結びにかえて

アナール学派の家族史研究の特徴は，「家族観」という視点から過去の家族を捉えようとしたことである[61]。つまり，過去の人々の「家族観」がどのようなものであり，どのように変化したのか，あるいは変化しなかったのかという観点から家族史にアプローチしたことである。この視点は，これまでみてきたように，アリエスの継承である。家族史の研究者，特に，本稿で扱ったフランドランとセガレーヌは，アリエスの研究の限界に挑戦しながら，彼ら自身の研究を展開させ，「家族観」研究をアナール学派の家族史研究の中心に据えたのである。フランドランは，アリエスの家族史研究の弱点であった研究対象の限界性の問題に取り組んだ。アリエスの研究では資料のもつ性格から一部の社会上層に研究対象を限定せざるを得なかったのであるが，フランドランは，この研究対象を教区教会裁判所の結婚契約破棄訴訟の記録を資料に加えることによって，1900年初頭までフランスの人口の80％を占めていた農民層に拡大した。しかし，フランドランの一連の研究においても，限界性の問題は完全に克服されたわけではなかった。フランドランの農民層の研究は，教区教会裁判所の結婚契約破棄訴訟の記録を資料とするため，教会の強制力が弱まりこの種の記録が姿を消す19世紀以降の農村家族を扱うことはできなかった。研究対象の問題は，依然として資料の限界性という問題に阻まれ，解決されたとはいえない状態にあった。19世紀の農村家族を独自の資料解釈から解明し，この限界性の問題に挑戦したのが，セガレーヌであった。セガレーヌは，アリエスの図像記述分析や，居住空間の分析を用いながら，民俗学者の記録を読み直すという作業を通して，19世紀の一般民衆の「家族観」を解明したのである。このようにして，アナール学派の「家族観」研究は，19世紀の民衆までをその射程に入れることが可能にな

注（59）ibid.〔14-15；（訳）20〕。Segalen〔1981-b；（訳）1987〕参照。
（60）ケンブリッジ・グループの Jack Goody が 'Foreword' で指摘〔Segalen, 1981-b；（英訳）1986：ix-x〕。
（61）岡田あおい〔1990〕参照。

ったのである。

この家族史研究の視点は，非常に意義深い。というのは，これまでの家族研究においては，客観的なデータから抜け落ちてしまう，人間の主観に属する「家族観」という“マンタリテ”を扱うことは射程外にあったからである。それを「学問領域」に包摂したことは，アナール学派の業績といえるだろう。

しかし，アナール学派の家族史研究には，まだ多くの問題点がある。最大の問題は，M.アンダーソンが「あるひとつの証拠事実については，しばしば複数の解釈が成り立ちうる」[(62)]と批判しているように，資料解釈の多義性にある。また，アナール学派の分析枠組が，変動の激しい近代以降の都市家族を分析するのに有効であるかどうかも問題になるだろう。

≪引 用 文 献≫

Aron, Jean-Paul: 〔1980〕. 'Préface', Jean-Paul Aron(dir.) *Misérable et glorieuse la femme du XIXe siècle*, Paris, 鈴木峯子（訳）「序文」片岡幸彦（監訳）〔1984〕.『路地裏の女性　19世紀フランス女性の栄光と悲惨』新評論　所収。

Anderson, Michael : 〔1980〕. *Approaches to the History of the Western Family* 1500-1914, London /Basingstoke, 北本正章（訳）〔1988〕.『家族の構造・機能・感情』海鳴社。

Ariès, Philippe : 〔1971 (1948)〕. 'L'enfant dans la famille', *Histoire des populations françaises et de leurs attitudes devant la vie depuis le XVIIIe siècle*, Paris, 森田伸子（訳）「第3章　家族の中の子ども」中内敏夫・森田伸子（編訳）〔1983〕.『<教育>の誕生』新評論　所収。

———: 〔1949〕. 'Attitudes devant la vie et devant la mort du XVIIe au XIXe siècle', *Population* no. 3.　中内敏夫（訳）「第2章　生と死への態度」中内敏夫・森田伸子（編訳）〔1983〕.『<教育>の誕生』新評論　所収。

———: 〔1953〕. 'Sur les origines de la contraception en France', *Population* no. 3. 中内敏夫（訳）「第1章　避任の起源」中内敏夫・森田伸子（編訳）〔1983〕.『<教育>の誕生』新評論　所収。

———: 〔1973 (1960)〕. L'enfant et la vie familiale sous l'ancien régime, Paris, English translation 〔1962〕. *Centuries of Childhood. A Social History of Family Life*, New York/Canada/London, 杉山光信・恵美子（訳）〔1980〕.『<子供>の誕生アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房。

———: 〔1960〕. 'Interprétation pour une histoire des mentalités', *Travaux et Documents Cahier* no. 35.　里見実・他（訳）「避任の心性史」産育と教育の社会史編集委員会（編）〔1983〕.『叢書―産育と教育の社会史　1　学校のない社会　学校のある社会』新評論　所収。

———: 〔1972〕. 'Problèmes de l'éducation', *La France et les française*, Paris, 森田伸子（訳）「第4章　教育の問題」中内敏夫・森田伸子（編訳）〔1983〕.『<教育>の誕生』新評論　所収。

———: 〔1975〕. *Essais sur l'histoire de la mort en occident du moyen âge à nos jour*, Paris, 伊藤晃・成瀬駒男（訳）〔1983〕.『死と歴史―西欧中世から現代へ―』みすず書房。

———: 〔1977〕. *L'homme devant la mort*, Paris.

———: 〔1978〕. 'L'histoire des mentalités', Le Goff (dir.), *La nouvelle histoire*, Prais, 中内敏夫（訳）「序　心性史とは何か」中内敏夫・森田伸子（編訳）〔1983〕.『<教育>の誕生』新評論　所収。

———: 〔1982〕. 'Le mariage indissoluble', *Communications* no. 35. 杉山美恵子（訳）〔1982〕.「婚姻制度の歴史」『現代思想』Vol. 10-14.

———: 〔1983〕. *Images de l'homme devant la mort*, Paris, English translation 〔1985〕. *Images of Man and Death*, Cambridge/Massachusette/London.

注（62）　Michael Anderson 〔1980 : 40 ; (訳) 1988 : 55〕。

———: 〔1985-a〕. '11 Love in Married Life', Ariès・etc. (dir.) *Western Sexuality. Practice and Precept in Past and Present Times,* Oxford/New York.

———: 〔1985-b〕. '12 The Indissoluble Marriage', Ariès・etc. (dir.) *Western Sexuality. Practice and Precept in Past and Present Times,* Oxford/New York.

Badinter, Elisabeth: 〔1980〕. *L'amour en plus,* Paris, 鈴木晶（訳）〔1981〕.『プラス・ラブ―母性の本能という神話の終焉―』サンリオ。

Baulant, Micheline: 〔1972〕. 'La famille en miettes. Sur un aspect de la démographie du XVIIe siècle', *Annales E.S.C.* no. 4-5.

Belmont, Nicole: 〔1978〕. 'La fonction symbolique du cortège dans les rituels populaires du mariage' *Annales E. S. C.* no. 3. 長谷川輝夫（訳）「結婚の民衆儀礼における婚礼行列の象徴機能」二宮宏之・他（編）〔1983〕.『アナール論文選2　家の歴史社会学』新評論　所収。

Berkner, Lutz k.: 〔1973〕. 'Recent Research on the History of the Family in Western Europe', *Journal of Marriage and the Family* Vol. 35: no. 3.

Bideau, Alain: 〔1980〕. 'A Demographic and Social Analysis of Widowhood and Remarriage. The Example of the Castellany of Thoissey-En-Dombes, 1670-1840', *Journal of Family History* Vol. 5: no. 1.

Bloch, Marc: 〔1939〕. *La société féodale. I La formation des liens de dépendance,* Paris, 新村猛・他（訳）〔1973〕.『封建社会　1』みすず書房。

———: 〔1940〕. *La société féodale. II Les classes et le gouvernement des hommes,* Paris, 新村猛・他（訳）〔1977〕.『封建社会　2』みすず書房。

———: 〔1949〕. *Apologie pour l'histoire ou métier d'historien,* Paris, 讃井鉄男（訳）〔1956〕.『歴史のための弁明　―歴史家の仕事―』岩波書店。

Braudel, Fernand: 〔1987 (1949)〕. *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II* Tome 1, 2, Paris.

———: 〔1969 (1958)〕. 'Histoire et sciences sociales. la longue durée (1)', *Écrits sur l'histoire,* Paris, 桑田禮彰・他（訳）「1　長期持続　―歴史と社会科学―」井上幸治（編・監訳）〔1989〕.『フェルナン・ブローデル〔1902-1985〕』新評論　所収。

———: 〔1969 (1958-1960)〕. 'Histoire et sociologie (1)', *Ecrits sur l'histoir,* Paris, 桑田禮彰・他（訳）「2　歴史学と社会学」井上幸治（編・監訳）〔1989〕.『フェルナン・ブローデル〔1902-1985〕』新評論　所収。

———: 〔1960〕. 'La démographie et les dimensions des sciences de l'homme', *Annales E. S. C.* no. 3.

———: 〔1979〕. *Civilisation matérielle, économie et capitalisme, XVe-XVIIIe siécle Tome 1 Les structures du quotidien. Le possible et l'impossible,* Paris, 村上光彦（訳）〔1985〕.『物質文明・経済・資本主義　15―18世紀　I-1 日常性の構造　1』『物質文明・経済・資本主義　15―18世紀　I-2 日常性の構造　2』みすず書房。

Burguière, André: 〔1972〕. 'Famille et société', *Annales E. S. C.* no. 4-5.

———: 〔1978-a〕. 'Le rituel du mariage en France. Pratiques ecclésiastiques et pratiques populaires (XVIe-XVIIIe siècle)', *Annales E. S. C.* no. 3. 長谷川輝夫（訳）「フランスにおける結婚儀礼―教会の慣習と民衆の慣習（16―18世紀）―」二宮宏之・他（編）〔1983〕.『アナール論文選2　家の歴史社会学』新評論　所収。

———: 〔1978-b〕. 'L'anthropologie historique', Le Goff (dir.), *La nouvelle histoire,* Paris.

ビルギエール, A.: 〔1989〕.「社会科学の危機と歴史学　―アナールの今日的課題―」『思想』no. 778.

Burke, Peter : 〔1980〕. *Sociology and History,* London, 森岡敬一郎（訳）〔1986〕.『社会学と歴史学』慶應通信。

Chamoux Antoinette : 〔1972〕. 'La reconstitution des familles. Espoirs et réaliés', *Annales E. S. C.* no. 4-5.

Chombart de Lauwe, Paul-Henry: 〔1972〕. 'La fin de la famille', *La Nef* no. 46/47.

Crisman, Miriam : 〔1983〕. 'Family and Religion in Two Noble Families. French Catholic and English Puritan', *Journal of Family History* Vol. 8 : no. 2.

Collomp, Alain: 〔1972〕. 'Famille nucléaire et famille élargie en Haute-Provence au XVIIIe siècle', *Annales E. S. C.* no. 4-5. 福井憲彦（訳）「18世紀オート＝プロヴァンスにおける核家族と拡大家族」二宮宏之・他（編）〔1983〕.『アナール論文選2　家の歴史社会学』新評論　所収。

———: 〔1977〕. Alliance et filiation en Haute Provence au XVIIIe siècle', *Annales E. S. C.* no. 3.

———: 〔1986〕. 'Familles. Habitations et cohabitations', Ariès et Duby (dir.) *Histoire de la vie privée* Tome 3, Paris.

Derouet, Bernard: 〔1980〕. 'Une démographie sociale différentielle. Clés pour un système aoto-régulateur des populations rurales d'Ancien Régime', *Annales E. S. C.* no. 1. 林田伸一（訳）「人口動態分析と社会階層　―アンシャン・レジーム期農村人口の自動調整システム解明の鍵―」二宮宏之・他（編）〔1983〕.『アナール論文選2　家の歴史社会学』新評論　所収。

Duby, Georges: 〔1972〕. 'Lignage, noblesse et chevalerie au XIIe siècle dans la région mâconnaise', *Annales E. S. C.* no. 4-5. 下野義朗（訳）「マコネー地方における12世紀の家系・貴族身分・騎士身分―再論」二宮宏之・他（編）〔1983〕.『アナール論文選2　家の歴史社会学』新評論　所収。

———: 〔1981〕. *Le chevalier, la femme et le pretre,* Paris, 篠田勝英（訳）〔1984〕.『中世の結婚　騎士・女性・司祭』新評論。

Fabre, Daniel: 〔1986〕. 'Familles. Le privé contre la coutume', Ariès et Duby (dir.) *Histoire de la vie privée* Tome 3, Paris.

Farge, Arlette: 〔1986〕. 'Familles. L'honneur et le secret', Ariès et Duby (dir.) *Histoire de la vie privée* Tome 3, Paris.

Febvre, Lucien: 〔1953〕. *Combats pour l'histoire,* Paris, 長谷川輝夫（訳）〔1977〕.『歴史のための闘い』創文社。

Flandrin, Jean-Louis : 〔1969〕. 'Contraception, mariage et relations amoureuses dans l'occident chrétien', *Annales E. S. C.* no. 6. 宮原信（訳）「西洋キリスト教世界における避妊・結婚・愛情関係」樺山紘一・山本哲士（編）〔1984〕.『シリーズ　プラグを抜く6　性・労働・婚姻の噴流』新評論　所収。

———: 〔1972〕. 'Mariage tardif et vie sexuelle. Discussions et hypothèses de recherche', *Annales E. S. C.* no. 6.

———: 〔1975〕. *Les amours paysannes. Amour et sexualité dans les campagnes de l'ancienne France (XVI-XIXe siècle)*, Paris, 蔵持不三也・野池恵子（訳）〔1989〕.『農民の愛と性―新しい愛の歴史学―』白水社。

———: 〔1984 (1976)〕. *Familles. Parenté, maison, sexualité dans l'ancienne société,* Paris, English translation 〔1983〕. *Families in Former Times. Kinship, Household, and Sexuality,* Cambridge/New York.

———: 〔1981〕. *Le sexe et l'occident. Évolution des attitudes et des comportements,* Paris, 宮原信（訳）〔1987〕.『性と歴史』新評論。

———: 〔1983〕. *Un temps pour embrasser. Aux origines de la morale sexuelle occidentale (VIe-XIe*

siècle), Paris.

———: 〔1985〕. '10 Sex in Married Life in the Early Middle Ages. The Church's Teaching and Behavioural reality', Ariès・etc. (dir.) *Western Sexuality. Practice and Precept in Past and Present Times,* Oxford/New York.

福井憲彦：〔1983-a〕.「イリイチと『アナール』第三世代の仕事をめぐって」山本哲士（編）〔1983〕『シリーズ　プラグを抜く　1　経済セックスとジェンダー』新評論　所収。

———: 〔1983-b〕.「歴史とフォークロア　ル・ゴフ論文によせて」『現代思想』Vol. 11-10.

———（編）: 〔1984〕.『シリーズ　プラグを抜く　5　歴史のメトドロジー』新評論。

———: 〔1985〕.「家族の多様性　フランス家族史研究から」『現代思想』Vol. 13-6.（『「新しい歴史」とは何か』に再録。）

———: 〔1987〕.『「新しい歴史」とは何か』日本エディタースクール出版部。

Gillis, John R.: 〔1981〕. *Youth and History. Tradition and Change in European Age Relations, 1770—Present,* New York, 北本正章（訳）〔1985〕『<若者>の社会史　—ヨーロッパにおける家族と年齢集団の変貌—』新曜社。

Gismondi, Michael A.: 〔1985〕. 'The Gift of Theory. A Critique of the histoire des mentalités', *Social History* Vol. 10 : no. 2.

Goubert, Pierre: 〔1977〕. 'Family and Province. A Contribution to the Knowledge of Family Structures in Early Modern France', *Journal of Family History* Vol. 2 : no. 3.

長谷川博子：〔1984〕.「女・男・子供の関係史にむけて　—女性史研究の発展的解消—」『思想』no. 719.

服部春彦：〔1980〕.「XII フランス歴史学の転換」河野健二（編）『ヨーロッパ　—1930年代—』岩波書店　所収。

速水融・安元稔：〔1968〕.「人口史研究における Family Reconstitution」『社会経済史学』Vol. 34. : no. 2.

Hughes, H. Stuart: 〔1968〕. *The Obstructed Path. French Social Thought in the Years of Desperation 1930-1960,* New York, 荒川幾男・生松敬三（訳）〔1970〕.『ふさがれた道　失意の時代のフランス社会思想　1930-1960』みすず書房。

Iggers, Georg G.: 〔1975〕. *New Directions in European Historiography,* Middletown, 中村幹雄・他（訳）〔1986〕『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房。

井上幸治：〔1979〕.「アナール学派の成立基盤　—フランス史学史におけるアンリ・ベルの位置—」『歴史評論』no. 354.

Laslett, Peter: 〔1965〕. *The World We Have Lost,* New York, 川北稔・他（訳）〔1986〕.『われら失いし世界—近代イギリス社会史—』三嶺書房。

———: 〔1972〕. 'Introduction: The History of the Family', Laslette (ed.) *Household and Family in Past Time,* Cambridge, French translation 〔1972〕, 'La famille et le ménage. Approches historiques', *Annales E. S. C.* no. 4-5. 林田伸一（訳）「家族と世帯への歴史的アプローチ」二宮宏之・他（編）〔1983〕.『アナール論文選 2　家の歴史社会学』新評論　所収。

———: 〔1977〕. 'Characteristics of the Western Family Considered over Time', *Journal of Family History* Vol. 2 : no. 2.

Lebrun, François: 〔1975〕. La vie conjugale sous l'Ancien Régime, Paris.

Le Goff, Jacques: 〔1973〕. 'L'historien et 《l'homme quotidien》', *Mélanges en l'honneur de Fernand Braudel* Tome 2, Paris, 福井憲彦（訳）〔1983〕.「歴史家と『日常的人間』　歴史学と民族学的まなざし」『現代思想』Vol. 11-10.

———: 〔1974〕. 'Les mentalités. Une histoire ambiguë', Le Goff (dir.) *Faire de l'histoire,* Paris,

English translation〔1985〕. '8. Mentalities. A History of Ambiguities', *Constructing the Past. Essays in Historical Methodology,* Cambridge.

———:〔1978〕. 'L'histoire nouvelle', Le Goff (dir.), *La nouvelle histoire,* Paris, 福井憲彦（訳）「新しい歴史学」福井憲彦（編）〔1984〕『シリーズ　プラグを抜く　5　歴史のメトドロジー』新評論　所収。

ル・ゴフ，J.:〔1976〕. 二宮宏之（訳）「歴史学と民族学の現在　—歴史学はどこへいくか—」『思想』No. 630.

Le Roy Ladurie, Emmanuel:〔1972〕. 'Système de la coutume. Structures familiales et coutumes d'héritage en France au XVIe siècle', *Annales E.S.C.* no. 4-5. 木下賢一（訳）「慣習法の体系—16世紀フランスにおける家族構造と相続慣行—」二宮宏之・他（編）〔1983〕.『アナール論文選2　家の歴史社会学』新評論　所収。

———:〔1973, 1978〕. *Le territoire de l'historien* Tome 1, 2, Paris, 樺山紘一・他（訳）〔1980〕.『新しい歴史　歴史人類学への道』新評論。

ル・ロワ・ラデュリ，E.:〔1984〕. 長谷川輝夫（訳）「"新しい歴史学"と現代科学」岩波書店編集部（編）『現代文明の危機と時代の精神』岩波書店　所収。

———:〔1985〕. 二宮宏之（訳）「歴史家の領域　—歴史学と人類学の交錯—」『思想』no. 728.

Loux, Françoise:〔1978〕. *Le jeune enfant et son corps dans la médicine traditionnelle,* Paris, 福井憲彦（訳）〔1983〕.『<母と子>の民俗史』新評論。

宮島喬:〔1979〕.「フランス社会学派と集合意識論　—歴史における"心性"の問題にふれて—」『思想』no. 663.

宮坂靖子:〔1985〕.「Ariès, Ph. の近代家族論の再検討　—家族機能論の視点から—」『家族研究年報』no. 11.

———:〔1988〕.「II　家族の歴史」金子淑子（編）『ワードマップ　家族』新曜社　所収。

宮沢康人:〔1985〕.『世界子どもの歴史　6　産業革命期』第一法規。

———:〔1988〕.「第1章　アリエスの近代と子ども・家族・学校　—『<子供>の誕生』を越えるまえに—」宮沢康人（編）『社会史のなかの子ども　アリエス以後の<家族と学校の近代>』新曜社　所収。

森岡清美:〔1987〕.「IX　家族の変化」森岡清美・望月嵩（共著）『改訂版　新しい家族社会学』培風館　所収。

森田伸子:〔1986〕.『子どもの時代—「エミール」のパラドックス—』新曜社。

———:〔1988〕.「第2章　アンシャン・レジームにおける子どもと社会　—その心性とイデオロギー—」宮沢康人（編）『社会史のなかの子ども　アリエス以後の<家族と学校の近代>』新曜社　所収。

本池立:〔1982〕.「『アナール』への道　—フランスの伝統的歴史学批判—」『思想』no. 702.

二宮宏之:〔1983〕.「歴史のなかの『家』」二宮宏之・他（編）『アナール論文選2　家の歴史社会学』新評論　所収.（『全体をみる眼と歴史家たち』に再録。）

———:〔1986〕.『全体をみる眼と歴史家たち』木鐸社。

落合恵美子:〔1985〕.「<近代家族>の誕生と終焉　歴史社会学の眼」『現代思想』Vol. 13-6.（『近代家族とフェミニズム』に再録。）

———:〔1989〕.『近代家族とフェミニズム』勁草書房。

荻野美穂:〔1988〕.「性差の歴史学—女性史の再生のために—」『思想』no. 768.

岡田あおい:〔1990〕.「≪アナール≫学派の家族史研究　—家族社会学の発展のために—」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』no. 30.

Phillips, Roderick:〔1976〕. 'Women and Family Breakdown in Eighteenth-century France. Rouen 1780-1800', *Social History* no. 2.

Pollock, Linda A.: 〔1983〕. *Forgotten Children. Parent-Child Relations from 1500 to 1900,* Cambridge, 中地克子（訳）〔1988〕.『忘れられた子どもたち』勁草書房。

Poster, Mark: 〔1978〕. *Critical Theory of the Family,* New York.

Revel, Jacques: 〔1979〕. 'Histoire et sciences sociales. Les paradigmes des Annales', *Annales E. S. C.* no. 6.

斎藤修（編著）: 〔1988〕.『家族と人口の歴史社会学—ケンブリッジ・グループの成果—』リブロポート。

産育と教育の社会史編集委員会（編）: 〔1984〕.『叢書—産育と教育の社会史　4　子どもの社会史　子どもの国家史』新評論。

Segalen, Martine: 〔1977〕. 'The Family Cycle and Household Structure. Five Generations in a French Village', *Journal of Family History* Vol. 2 : no. 3.

———: 〔1980-a〕. *Mari et femme dans la société paysanne,* Paris, English translation 〔1983〕. *Love and Power in the Peasant Family. Rural France in the Nineteenth Century,* Oxford, 片岡幸彦（監訳）〔1983〕.『妻と夫の社会史』新評論。

———: 〔1980-b〕. 'Femmes rurales', Aron (dir.) *Misérable et glorieuse, la femme du XIXe*, Paris, 藤本佳子（訳）「農村の女」片岡幸彦（監訳）〔1984〕.『路地裏の女性—19世紀フランス女性の栄光と悲惨—』新評論　所収。

———: 〔1981-a〕. *Amours et mariages de l'ancienne France,* Paris, 片岡幸彦・陽子（訳）〔1985〕.『儀礼としての愛と結婚—中世から現代まで—』新評論。

———: 〔1981-b〕. *Sociologie de la famille,* Paris, English translation 〔1986〕. *Historical Anthropology of the Family,* Cambridge/New York/Melbourne, 片岡陽子・他（訳）〔1987〕.『家族の歴史人類学』新評論。

———: 〔1985〕. *Quinze générations de Bas-Bretons. Parenté et société dans le pays bigouden Sud, 1721-1980,* Paris.

———: 〔1986〕. 'La révolution industrielle. Du prolétaire au bourgeois', Burguière. etc (dir.) *Histoire de la famille* Tome 2. Paris.

セガレーヌ, M. : 〔1981-c〕. 福井憲彦（訳）「女性の役割・地位・イメージ　—女性の存在情況研究のための若干の考察」樺山紘一・山本哲士（編）〔1984〕.『シリーズ　プラグを抜く　6　性・労働・婚姻の噴流』新評論　所収。

Shorter, Edward: 〔1973〕. 'Female Emancipation, Birth Control, and Fertility in European History', *American Historical Review* Vol. 78 : no. 3. 松野安男（訳）「女性解放と産児制限の社会史」産育と教育の社会史編集委員会（編）〔1984〕.『叢書—産育と教育の社会史　3　生活の時間・空間　学校の時間・空間』新評論　所収。

———: 〔1975〕. *The Making of the Modern Family,* New York, 田中俊宏・他（訳）〔1987〕.『近代家族の形成』昭和堂。

Smith, Harvey: 〔1984〕. 'Family and Class. The Household Economy of Languedoc Winegrowers, 1830-1870', *Journal of Family History* Vol. 9 : no. 1.

Stone, Lawrence: 〔1977〕. *The Family. Sex and Marriage in England 1500-1800,* New York.

杉山光信: 〔1981〕.「『社会学年報』から『経済社会史年報』へ　—1920年代のマルク・ブロックとリュシアン・フェーヴル—」『思想』no. 688.

竹岡敬温: 〔1978〕.「『アナール』学派と時系列史」『社会経済史学』Vol. 44 : no. 4.（『「アナール」学派と社会史—「新しい歴史」へ向かって—』に再録。）

———: 〔1990〕.『「アナール」学派と社会史—「新しい歴史」へ向かって—』同文舘。

Tilly, Louise A. : 〔1979-a〕. 'Individual Lives and Family Strategies in the French Proletariat',

Journal of Famil of Family History Vol. 4 : no. 2.

———: 〔1979-b〕. 'The Family Wage Economy of a French Textile City. Roubaix, 1872-1906', *Journal of Family History* Vol. 4 : no. 4.

Tilly, Louise A. & Scott, Joan W.: 〔1975〕. Women's Work and the Family in Nineteenth-Century Europe, *Comparative Studies in Society and History* Vol. 17-1.

———: 〔1978〕. *Women, Work, and Family,* New York.

Todd, Emmanuel: 〔1983〕. *La troisièm planète. Structures familiales et système ideologiques,* Paris, English translation 〔1985〕. *The Explanation of Ideology. Family Structures and Social Systems,* Oxford/New York.

Vovelle, Michel: 〔1977〕. 'Le tournant des mentalités en France 1750-1789. La 'sensibilité' pré-révolutionnaire', *Social History* no. 5.

———: 〔1978〕. 'L'histoire et la longue durée', Le Goff (dir.), *La nouvelle histoire,* Paris.

Wrigley, Edward Anthony: 〔1969〕. *Population and History,* London, 速水融（訳）〔1982〕.『人口と歴史』筑摩叢書。

山口昌男：〔1976〕.「歴史人類学あるいは人類学的歴史学へ―ジャック・ルゴフの『歴史学と民族学』をめぐって―」『思想』no. 630.

山瀬善一・中村美幸：〔1979〕.「フランス<アナール>学派の方法」角山栄・速水融（編）『講座西洋経済史 V 経済史学の発展』同文舘 所収。

安元稔：〔1989〕.「17―18世紀ヨーロッパの人口変動」柴田三千雄・他（編）『シリーズ<世界史への問い> 1. 歴史における自然』岩波書店 所収。

余宮道徳：〔1979：1980：1982〕.「西ヨーロッパの直系家族をめぐる最近の歴史的家族研究について ―特にバークナーとラスレットを中心として―」『福岡大学人文論叢』 Vol. 11 : no. 2., Vol. 12 : no. 3., Vol. 13 : no. 3.

米山秀：〔1987〕.「前近代イギリス家族史 ―1980年代前半の研究史―」『三田学会雑誌』vol. 80 : no. 1.

湯浅赳男：〔1985〕.『文明の歴史人類学 ―『アナール』・ブローデル・ウォーラーステイン―』新評論。

（慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程）